

熊本学会を終えて (K. Ogino) [J]

2024年度の日本独文学会秋季研究発表会は、西日本支部の担当となり、熊本大学を会場として開催された。前回熊本で全国学会が開催されたのは昭和63（1988）年のことであった。ということは、今から遡ること37年前ということになる。今回、開催直前までは、はるばる九州の地へどれほどの数の学会員においていただけるものであろうかと気をもんだものだが、蓋を開けてみると、170名以上の会員にご参加いただいた。また、懇親会にも多くの方が足を運んでくださり、あらためてお礼申し上げます。

さて、前回の熊本学会が開催された当時は、1991年の大学設置基準の大綱化がまだ実施される前だったので、熊本大学には教養部・文学部合わせて多い時には10名以上の日本人ドイツ語教員と、2名のドイツ人講師が在籍していたはずだ。往時の学会の雰囲気については、同学社発行『ラテルネ』60号「特集I・熊本学会に寄せて」（『ラテルネ記念総輯号（II）—31号～60号—』、459～481頁に再録）に詳しく紹介されているので、そちらをご覧いただきたい。それにしても、「昔の光今いすこ」とはよく言ったもので、今回学会開催時点での熊本大学専任教員はわずか3名。一年前に開催についての意向を打診されたとき、招集された最初の会合（定年退職した私も同席）では、学内業務に加え、学会開催に伴うさまざまな負担を考えると、このマンパワーでは開催はかなり難しいのではないか、という雰囲気が大勢であったように思う。だが、私にはなんとかなるのではないかという、私自身の学会経験からくるある種の確信めいたものがあった。それは、前任校の東京都立大学で2000年に開催された「第54回総会・春季研究発表会」を担当したときの経験に基づくものであった。その当時、大学にはたしか10名前後の教員がいたはずだが、実際に実働部隊あるいは裏方として汗を流したのは3名程の教員だったので、現実に何名の教員がいるかとは関係なく、とにかく動いてくれる人が3人いれば、そして学生アルバイトを動員すれば、なんとかなるものだということを学んでいたからである（もっとも、当時、有能な助手が2名いたことも幸運だったのだが）。そこで私は、その後の会合でその時の経験を披露させていただき、議論を重ねた結果、益敏郎先生を実行委員長として、熊本で学会開催をお引き受けするという結論に至った。

実行委員会には、熊本大学の3名の教員のほかに、竹岡西日本支部長、堺支部選出理事が加わり、準備が進められていった。実行委員会の先生方の並々ならぬご苦労にはまったく頭の下がる想いを抱くばかりだが、今回熊本で開催できたことは大変良かったのではないかと思っている。というのも、一度スルーをしてしまうと、経験が継承されず、次回お声がかかった時にはハードルが高く感じられてしまい、復帰することが難しくなると思うからだ。最後に、前回の京都学会から取り入れられた「オンライン決済サービス」は、開催校の負担をなるべく軽減する工夫として今後も利用できるのではないかという印象を持った。実際、熊本では、参加者の約半数がこれを利用していた。また、シンポジウムII「ドイツ語のノモンスとテシス」では、発表資料を紙媒体で配布するかわりに、QRコードから入ると手元のス

マホやタブレットに表示されるといった方法をとっていたが、これなども一つの興味深い試みではなかろうか。

荻野蔵平（熊本大学名誉教授）

0204

作成日：2025/04/11